博物館アラカルト⑨

葛子琴墓誌銘拓本

葛子琴は，元文４年（1738）に大坂で生まれました。名を張、字は子琴、通称橋本貞元、本姓葛城氏で蠡庵と号しました。医者を本業とした子琴ですが、片山北海を盟主とした大坂の混沌社に参加し、詩才随一と称されました。この混沌社の一員であった頼春水の『在津記事』に、「子琴は、みんなと談笑しながらでも必ず一篇の詩をなし、人に接する態度が謙虚で、混沌社の集会に子琴なければ、楽しまずというほどの人気者であった」ことが記されています。

その詩について、同じ混沌社メンバーで墓誌の撰者岡元鳳は、「其詩、清新婉約、才は巧を掩はず、而して趣真に入る」と称しています。さらに、笙や篆刻などもよくする多才の人でもありました。

菅茶山とは、安永９年（1780）に出会って以来、親しくその交流を重ねています。「黄葉夕陽文庫」にも子琴の詩が数首確認されていますし、茶山の詩集『黄葉夕陽村舎詩』にも子琴に関わる詩が多く収められています。

茶山の随筆『筆のすさび』稿本の中で、混沌社との交流を綴っており、子琴について「子琴は若い時大坂三郷に知らぬ者のいない美男子であった。と宿屋のおかみがいうが、私が会ったときはすでに大入道であった」と記しています。

しかし、その子琴は、天明４年（1784）46歳の若さで亡くなります。残された幼子たちは、篠崎三島をはじめとした混沌社のメンバーたちが援助をしました。これも子琴の人柄をよく表しているといえます。

茶山も『黄葉夕陽村舎詩』のなかに「寄弔葛子琴」があります。寛政６年（1794）には、大坂の天満へ墓参りにも訪れています。

当館所蔵の拓本は、三枚の捲（表装していないもの）です。しかし、裏打ちしてあり、しっかりと保存されていました。

晩年病床の茶山は、「読旧詩巻」の中で昔を思い出し、若い時の詩友であった子琴を晩唐の詩人温庭筠に例えています。

子琴の墓は、現在大阪市の栗東寺にありますが、表面の剥落が激しく文字はほとんど残っていません。この拓本は、墓誌を記憶した資料として貴重だといえます。　　（主任学芸員　岡野将士）

葛子琴墓誌銘拓本

栗東寺にある墓